

治療法

作：バリー・ワイズマン

訳：らっぱ亭

The Cure

by Barry Weissman

The Third Foundation #89, (July-August 1969)

ハリー・ブラインダーモーフは血走った目で汚れた窓の看板を見つめ、一度鼻を吸った。

苦しいですか？

風邪ですか？

風邪の治療法がついに発見されました。

もう苦しまなくていいのです！

ウイルス性気管支感染症の専門家、ブランドン・チャズワース医師の診察を受けてください。
スイート 234

これ以上、悪化することはないだろう。ここに来た限りは、試してみよう、とハリーは思った。ファンズウォグル夫人も推薦してくれたし…。ハリーは着古したオーバーコートをしつかりと羽織り、古いオフィスビルの狭い階段を上り始めた。

ハリーは風邪の申し子だった。物心ついたときからずっと、ハリーは風邪をひいていた。たぶん同じやつだ。時にはこの病から解放される日もあった。インフルエンザ、水ぼうそう、はしか、下痢、ルーマニア溪谷熱、白癬、食中毒、足のかゆみ、あせも、耳たぶの炎症、黄色眠り病、ポーランド船酔い症などに罹っている間は。しかし、ハリーの真の宿敵は風邪だった。部屋の中に水滴がついたコップがひとつあるだけで、ハリーはくしゃみを連発するのだった。

ついにある晩、大家であるファンズウォグル夫人がハリーに会いに来た。豆ボタンのような鼻と甲高い声の小柄な老女だ。

「お願いします、ブラインダーモーフさん」彼女は豊かな英国風のアクセントで言った。「もう少しばかりくしゃみを我慢できませんか。私のかawaiiそうな古いテレビがひっくり返りそうなんですよ。あなたがくしゃみをするたびに、テレビがしゃっくりするんですの」

「申し訳ありません、ファンズウォグルさん。やってみます」

「ブラインダーモーフさん、けっして詮索するつもりはないんですが、チャズワース先生に風邪を治してもらおうと考えたことはありませんか？」

「ザドワスしえんしえいですか？ いいえ、ありませんでず」

「亡くなった夫のメルヴィンは、生きていた頃は風邪をひくといつもチャズワース先生に診ていただいております。一回5ドルで、ふうっ！」彼女は汗ばんだ大きな手で身振りを交えて言った。「完治したのです！ 奇跡が起きたの。おそらく政府か何かの秘密の処方箋を持っているんだわ」彼女は囁いた。「ヘキソベンゾメトホルシナルのようなものね。彼に診ていただいたら？ 14番街においでるのよ。さあ、住所を教えてくださいわね」ハリーが何度か鼻をかんでいる間、彼女はしばらく古ぼけたアパートの部屋に消えていたが、鉛筆で住所が書かれた小さな白いカードを持って戻ってきた。

「ここよ。一階の窓に看板があるから、見逃すことはないわ。彼は二階においでますから…」

待合室はさほど広くはなく、救世軍から救出してきたとおぼしき傷だらけの木製の椅子がいくつかと、同じく傷んだ年代物の雑誌棚には耳折れ色褪せた『ライフ』や『レディース・ホーム・ジャーナル』が並び、一冊だけ『アンノウン』という興味深い名前のSF雑誌あって目を引かれた。少なくとも二十年以上前のものだったからだ。これまでこの手のものを読もうと思ったことはほとんどなかったのだが。彼は内側のドアのベルを鳴らし、鼻を吸り、くしゃみをしながらその雑誌を読んだ。

ハリーがその雑誌で最初に気づいたのは、誰かが余白にメモを書いていたことだった。どんな本でもページを汚すのは犯罪だというのがハリーの持論だったが、これは汚すよりもひどい。それはなんだか不穏で、きっちりと印刷された暗号のような小さなメッセージだった。吸血鬼の話の横には「非常に正確」、悪魔の召喚を描写した箇所の後には「違う、違う、すべて間違い」など、明らかに読者に物語のある側面を指摘するために書かれたメモ書きだった。

しかしハリーがこのメモ書きについてじっくり考える時間はなかった。というのも、すぐにパリッと糊の利いた白衣を着た、背が高く痩せて貧血気味にみえる男が内側のドアを開

け、外を覗き見て、訝しげに尋ねたからだ。「あなたはどなたですか？」

「ハリー・ブラインダーモーフです。外の看板を見ました」

「おお、そうです、そうです、そうです」男は広告の存在を忘れていたかのように言った。「そうそう。では、あなたはつぎになります」男は後ろからとても太った女性を外へとエスコートし、戻ってきた。

「新患はあまり来ないんだよ」彼はそう言って、ハリーを診察室の中へと案内した。そこは外の待合室と同じくがらんとしており、同じ椅子があと2脚と、溢れかえった本棚、ファイルキャビネット、同じく年代ものの机があった。医師は——もし本当にそうだとしたら——机の後ろに座り、ハリーにも椅子を示すと、机の一番上の引き出しから埃まみれの用紙を取り出した。うっすらと張り付いた粉塵を吹き飛ばし、その用紙を机の上で延ばし拡げ、古い万年筆を手書き始めた。

「では、記録を整理するために、まずあなたのフルネームを正確に教えてください」。

「ハロルド・ベイカー・ブラインダーモーフ、B・L・I・N・D・E・R・M・O・R・Fです」。

ハリーが医師の質問にすべて答えると、こう言われた。「ふむ。ブラインダーモーフさん、あなたは確かにひどい風邪をひいていますね。うちにおいでたのは正解でした」ハリーは、医者のにんに似たような輝きがあることに気づいた。あまり好ましいものじゃないやつだ。突然、最初の衝動に従って階段を上らなければよかったと思ったが、もう遅かった。医師はハリーの不快感に気づかず、こう続けた。「お分かりかもしれませんが、私の方法はかなり秘密で、特許が取れるまでは守らなければなりません。ですから、あなたを治療する間、麻酔をかけなければならないことはご理解いただけたと思います」

突然、医師がゴム製のマスクを手にし、ハリーの驚いた顔にかぶせた。やわらかなクッションのような暗闇に飲み込まれる直前、ハリーは男の笑顔の歯の奥から、ピンク色の小さなチューブのような舌が、期待に胸を膨らませて顔をのぞかせるのが見えたような気がした。

ねっとりとした粘りつくような目。静寂に包まれ、冷たい風がハリーの顔を舐めた。突然、ハリーは自分が目を覚ましていることに気づき、注意深く一つずつ目を開けた。

ハリーは見覚えのない診察室の一角にある手術台の上に横たわっていた。窓がひとつある静かな白い部屋だ。開け放たれた窓から見える空は深い青色で、外からは鳥たちがお互いを嘲り、威嚇し合う囀りが聞こえてくる。そして、通りでアイスクリームの屋台のベルが鳴り響き、子供たちの叫ぶ声が聞こえ、ハリーは息をついた。

ハリーは息ができた！

ハリーは喜んで医師に5ドルを支払った。

「先生の治療法がどんなものであれ、素晴らしいです。こんなに呼吸ができるなんて、もうずっとできなかったのに。いったいつから、もういつからかもわからないくらい、ずっと」

医師は微笑んだ。「力になれて嬉しいよ、ハリー」と彼は言った。その男はなぜかさっきほどは痩せていないように見え、頬には鮮やかで豊かな色が戻っていた。ハリーは、この素晴らしく献身的な治療医を疑っていたことを後悔していた。「また風邪に罹ったら、診てあげるのでおいでなさい」

「そうします。そうしますとも。では失礼します、先生」

ハリー・ブラインダーモーフは14番街の古ぼけたビルから出て行った。自由の身となり、新しい男となり、完治した人となり、口笛を吹きながら通りを歩いて行った。風邪はひいていない！

少なくともハリーは、自分は自由の身だと思っていた。しかし、ハリーはだんだんと、自身に起きている変化に不安を感じるようになってきた。風邪をひかなくなり、鼻を吸ってもない日が何日も何週間も続き、これはハリーにとってまさに奇跡のようなことだったが、それでも…。周囲の誰かがくしゃみをするたびに、思わずびくりとしてしまう。そしてある夜遅く、ファンズウォグル夫人のアパートの上階の住人が鼻をかんだとき、ハリーは不思議なざわざわする渴望を覚えた。

ハリーは舌が細長くなったことに気づいた。そして誰かが鼻をかんだりくしゃみをするのを見たり聞いたりすると、舌が巻いてしまうという不穏な傾向がみられた。その奇妙な欲

望は、ことあるごとに次第に強くなっていくのだった。

最後となる騒動は、クラッシュリー・ウィガル・ワークス・サブライハウスにあるハリーのオフィスで起こった。ある日、秘書が風邪をひいてきたのだ。その朝、彼女がハンカチを鼻に当てながら部屋に入ってきたとき、ハリーは自分が飛びつきそうになるのを感じた。彼女が口述筆記の最中に不注意でくしゃみをしたとき、ハリーは我を忘れそうになり、その後、彼女が清書しているときに薄いパーティション越しに聞こえてくる汁気たっぷりの鼻をかむ音に、なんとか平常心を保とうとして気が狂いそうになった。

ハリーは懸命に抗ったのだが、ついにその努力は限界に達した。秘書室でスーザンがタイピングと鼻をかむのを交互に繰り返しているとき、ハリーは意識が遠のいた。その刹那、消費者週報を作成している彼女を後ろから襲おうとしている自分に気がついた。舌は巻いて以前の2倍の長さになり、大量の汗をかいていた。抑えきれない圧倒的な渴望…だめだ、だめだ、だめだ！

「ブラインダーモーフさん、大丈夫ですか？　ここ数週間、顔色が悪いですよ！」これも本当のことで、ハリーには理解できなかった。最近はずっと食欲がなかった。少なくとも普通の食べ物は…。「水を一杯持ってきますね」

「だめだ！　僕に近づくな！　大丈夫だから。お願いだ、スーザン…報告書は…今日中に出せばいいから…」ハリーは急速に自制を失っていた。彼は逃げ出さなければならなかった。「出かけてくる」彼は震えながら言った。「また戻ってくるから」彼は自分がしたいことが怖くなり、オフィスを飛び出した。むかむかすること、吐き気を催すこと、胸くそ悪いこと。それでも彼は渴望し、欲しがり、身体が求めている…だめだ！

ハリーは緊急に助けを必要としており、この最も困難な時に彼が思い当たり、信頼できるのはチャズワース医師だけだった。医師はハリーが以前抱えていた最大の問題を解決してくれた人物であり、今回の問題は専門外とはいえ——ハリーはこの障害が精神的なものと疑っていた——ハリーが信頼できる人物だった。ハリーはチャズワース医師のオフィスがある通りまで急ぎ、古いビルの階段を二段ずつ駆け上がり、待合室を飛び越え、医師の診察室に飛び込んだ。医師はそこで患者を治療していた。ハリーが入ってくると、医師は顔を上げた。

「先生、先生、助けてください！　ぼくは衝動に駆られているんです。先生！」

ハリーは、医者が患者にしていることを目の当たりにして、気を失った。

ハリーは暗闇の中で目を覚ました。

「あれ、ここはどこ？」

「もう大丈夫だよ、ハリー」医師の声は滑らかで落ち着きがあった。「しばらくの間は、五分五分ってところだったけどね。君に大量投与をするために、昼食を抜うはめになってたんだよ。なぜ本能に従わなかったのかね？ そうすればこんなことにはならなかったのに」

「大丈夫だって？ あんなことしておいて？ どうして…」

「馬鹿なことを言うなよ、ハリー。君も同じことをしたかったんだろ？」それは事実だった。ハリーはそのことに深く恥いり、おののいた。

「先生、ぼくに何が起きているんですか？ なぜそう感じるのですか、なぜぼくは…したいのですか？」

「君はまだわかっていない」チャズワースはため息をついた。「すまない、ハリー。私のせいだ。こんなことになってほしくはなかったんだが。君のためにはとても長い時間施術しなければならなかった。長すぎたんだ。今、君は私と同じだ。こんなことは滅多にないんだけど、時々は起こるんだ。それがこの仕事の危険なところだよ」

彼は続けた。「君と私のふたりとも養えるように、仕事を拡大しなくちゃならない。少なくとも、君が自分のことは自分でできるようになるまではね。危険は増すだろうが、生きていかなければならないからね」。

「あなたと同じとはどういう意味ですか？ 本当のところ、あなたはいったい何者なのですか？ 僕に何をしたんですか？」

「私がどうやって風邪を治療したと思うんだ？」医師はいらついてきた。「それに、君が持っている奇妙な…渴望…この二つを合わせればいい。ハリー、すべて明白なことなんだ。考えてみる！」

ハリーは突然あの雑誌を思い出し、そして理解した。「ぼくたちは——」

「その通り、私たちはヴァンパイアだよ、ハリー。粘液を吸^{ミューカス・ヴァンパイア}る吸粘鬼なんだ」

.....

カモガワ奇想グランプリ応募作（一次審査通過するも落選）

一行梗概：ヴァンパイアには血の他にも様々な体液を吸う亜種がいて、これは粘液を吸るタイプの話

三行梗概：生まれつきずっと風邪に悩まされてきたハリーは、大家さんの勧めでチャズワース医師の診察を受ける。麻酔下に施行された謎の治療法は画期的で、すっかり風邪から解放されたハリー。ところが、やがてハリーは奇妙な衝動にかられるようになって…。

SF マガジンの SF スキャナーで浅倉久志が紹介したという伝説のバカ SF。SF ファンたちが、吸血鬼は血を吸うけど、他の体液を吸うタイプもあるんじゃないか。例えばリンパ液を吸うのとか。じゃあ首筋じゃなく腋窩に噛みつくのか、なんて馬鹿話の流れで生まれたそう。かのハーラン・エリソンが『危険なヴィジョン、ふたたび』編賛時に「あまりに危険すぎる」と没にしたとの噂もあったが、元文章を確認したら『Dangerous Revisions』となっていて、これもファンのお遊びっぽいですね。（『危険なヴィジョン、ふたたび』の原題は『Again, Dangerous Visions』なのだ）

しかし、なんでいままで訳されなかったのかなあ。あまりにバカバカしいから、誰も手をつけなかったのか。かくて伝説は生まれる。伝説のままが良かったのかもしれない。

これ、もし当時訳されてたら、絶対に誰か日本の SF 作家が悪ノリしてパロディ書いてただろうなあ。例えば、風邪の治療医じゃなくて、便秘の治療医の話。そしてラストは「私たちはヴァンパイアだよ、ハリー。吸ケツ鬼(Feces Vampire)なんだ」